

(Une mandarine froide)

ちむいみかん

安倍 枕流

【登場人物】

女

二〇〇三年一月一六日深夜。

下手に窓が一つ。窓から、ネオン・サインの明かりが差し込んでいる。

微かに、街のざわめきが聞こえる。

部屋の真ん中に寝転んでいる女。布団も毛布もなく、コートを被っている。やゝあつて、むっくりと起き上がる。

女 さむ……

腕時計を見る。

女 あかん、もう、こんな時間や……

坐わり直す女。

女 えつと……

起き上がつて、戸口の辺りへ行き、電灯のスイッチを押す。が、灯りは点かない。

女 あれ……。そっか、電気も止められたか……

その辺を探つて、仏壇用の蝋燭と灰皿を出してくると、コートのポケットからライターを出して、火を点ける。それから、灰皿に蝋燭を垂らして、蝋燭を立て、部屋の真ん中に置く。部屋、やゝ明るくなる。

女 正月もとづくに過ぎたいうのに、クリスマスみたいやな……。ジングーベー、ジングーベー、つか……。鳴れへんわ、鈴なんか……。窓の外の電気が色とりどりで、ちよつとしたルミナリエやな……。そういうたら、ルミナリエつて、何や、大層な理由付けて、あの年の十二月から始まったんやっただけ……。 (指を折つて) 九五、九六、九七……。もう、八年目か……。そうそう、あんどき、大学卒業したんやもんな……。よう続いてるよな、ルミナリエ……

ト、蝋燭をもう一本取り出すと、火を点けて立てゝみる。

女 ジングーベー、ジングーベー……。仰山、人おつたなあ、ルミナリエ……。考えたたら、あんどきだけか、行つたん……。お腹空いたのに、食べるとこ、どっこも満員で……。よう考えたたら、あん時から判つとつたんや、段取り悪いの、あの男……

自分のお腹の辺りを覗き込む。

女 鳴つたかな……。？ 鳴るやろなあ……。丸二日か……。考えたたら、えゝダイエットかも……。まあ、いまさら、何の意味もあれへんけど……。ジングーベー、ジングーベー、腹が鳴るう……。しようもな……

ころりと仰向けになる。

女
眠いなあ……。寒いなあ……。お腹空いたなあ……。そうしたら、あんときもそうやったよなあ……。もう八年か……。こんな風にして、夜が明けるまで、一人で、ぼうつと空見とった……。土壁の臭いがたちこめとって……。お腹空いたなあ、と思って、横向いたら、仕舞い忘れとった鏡餅の上のみかんが、何でか、ガラクタの上に転がって……。もうシワシワで、黴はえてそうやったけど……。美味しそうに見えた……。ジングーバー、ジングーバー……。シワシワのみかん……。よう考えたら、シワシワのみかんみたいな男に惚れてもうたんで、そのせいなんかも……。ちえつ、失敗やったなあ……。ジングーバー、ジングーバー、鈴が鳴るう……

起き上がって、コートのポケットを探る。

女
煙草……。あれへん……。食べるもんあれへん……。電気も水道もあれへん……。なーんもあれへん……。ま、えゝわ……。ジゴージトクやし……。それに、もうすぐ、みーんなあれへんようなんねんし……

蝋燭の火を見つめる。

女
綺麗やなあ……。ルミナリエなんかより、ずっと綺麗ちやうやろか……。うん、やっぱり、地味な方が綺麗なことかであるよなあ……。けど、あつちの奥さんとウチやったら、どっちの方が地味なやろ……。ま、どっちもどっちか……

もう一本、蝋燭を立てる。

女
ジングーバー、ジングーバー、つか……

ふっと、思い出し笑い。

女
ほんま、段取り悪かったよなあ、あのシワシワ野郎……。ダブルブックングしやがって……。おかげで、バレてしもた……

横になったまゝ、かき抱くように両腕を宙に伸ばす。

女
これくらいやったかな……。それとも、これくらい……。？ ジングーバー、ジングーバー……。セーター、プレゼントするからいうて、ぎゅつとしてみたんや、最初……。シワシワやのに……。あつたかつた……。チクシヨ……。シワシワやったのに……。ショーミキゲンギレのくせして……

空気を抱きしめる。

そのまゝ、子供のように縮こまる。

女
寒いなあ……。眠いなあ……。お腹空いたなあ……。泣きたいなあ……。泣いたらか……。えーん、えーん……。ようやったなあ、ウソ泣き……。毎回バレて、おかあちゃんに怒られて……。それでも懲りんと……。えーん、えーん……

起き上がる。

女 あかん……。最後やのに……。もっと、シヤキツとしよ……

坐わり直す。

女 いうても、別に、準備することもないし……

部屋を見回す。

女 我ながら、殺風景な部屋やなあ……。三十女の部屋……。なーんもあれへん……。箆筒も、鏡台も……。けど、あの日から、怖くて、箆筒なんか置かれへんようになったし、しやあないか……

扉の方を見る。

女 新聞、載るやろか……。載れへんか……。きょうび、多いし……

蠟燭を見る。

女 よしっ……

コートの別のポケットを探ると、薬の容器を取り出す。

女 しっかし、便利なもんやな、インターネットいうんは……。ガンマ・ヒドロキシ酪酸……。最近の睡眠薬はあかんそうやけど、こいつはドラッグやしな……。最後のお金、使い果たしたんやからな……。頼むで……

コートの別のポケットから、ウイスキーの小壺を取り出す。

女 けど、まさかユニコも、会社辞めたヤツが、頼み込んでインターネット使わせてもらって、こないなもん買ってたとは思わへんやろなあ……。ユニコ、ごめん……。けど、ウチ、あんたにウソついたことなかったし、堪忍や……

薬の容器を開け、中の錠剤を頬張ると、ウイスキーで流し込む。

女 ジングーベー、ジングーベー……。ウイーツと……。キクー……

二回ほどで、薬を飲み干す。

女 おとうちゃん、おかあちゃん、親不孝な娘でゴメン……。まあ、もうちよつとで、そっち行くけど、怒らんとつてや……

ふつと蠟燭を吹き消し、また仰向けになる。暗くなる部屋。
女は、のろのろと腕を上げると、大儀そうに腕時計を見る。

女

今、五時四十分……。ほら、もうすぐ、あんどきの時間や……。あんどきみたいに、眠くて、寒くて、お腹空いて……。ひよと、横見たら、シワシワのみかんが、ぽつんと……。あ、ねむ……。けど、美味しそうやつてんもん、みかん……

静かになる女。

溶暗。

やゝあつて、窓から明かりが差し込み始める。

朝。

ゆつくりと目覚める女。

女

さむ……

起き上がつて、辺りを見回し、転がっている薬の容器を手にとってしげしげと眺める。

女

たどの睡眠薬……。段取り悪う……。ウチもいつしよか……

立ち上がつて窓辺に向かうと、手にしていた容器を、窓越しに思い切り抛り投げる。

女

クソツタレ……！

戻つてきて、蠟燭の燃えさしと灰皿を袋に抛り込む。

女

お腹空いたな……

窓越しに外を眺め、ふつと、笑う。

女

おとうちゃん、おかあちゃん、もうちよつと先にしてみるわ、そつち行くのん……。 (袋とコートを一ひつつかみ、去りながら) ジングーベー、ジングーベー、腹が鳴るう……

音楽。

幕。